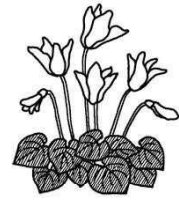


## <知能検査の得点〇×クイズ>

1. 得点（IQ、指標得点、群指数）は、高ければ高いほど障害の可能性は低い。
2. 得点のバラつきや偏り（グラフの凹凸）がないのは、よいことだ。  
障害の可能性は低い？
3. 得点が上昇すれば、問題は減少する？
4. 同じ子どもに数年後に検査すると、同じような得点パターンになる？（検査者、環境は同じ）
5. 得点パターンを見れば、何の障害であるか分かる？
6. 知能検査で得点の低かった問題を教材にして学習し、検査の得点を上昇させると、学力も伸びる？



- 1 得点が高いと知的障害の可能性は低くなるが、発達障害の可能性は変わらない。
- 2 定型発達児でも、得点のばらつきや偏りは小さく、IQが高いほどばらつきや偏りは大きくなる。ADHD等では、障害が顕著なのに、ばらつきや偏りが見られない事例も多い。
- 3 得点が増えると、問題が減少することもあるが、因果は逆かも。また、問題が減少しても得点は変わらないこともある。
- 4 年齢を重ねても、得点パターンが変わらない子もいるが、多くの子は発達や教育によってパターンが変化する。
- 5 得点パターンでは、障害種別は分からない。自閉スペクトラム症、ADHD、発達性読み書き障害は、同じような得点パターンになる。（ワーキングメモリー、処理速度が低い）
- 6 3で述べたように、得点の上昇と問題の減少は直接的には関係ない。また、知能検査を教材にすべきではない。

\*答えは全て×でした。

参考資料：日本臨床発達心理士会茨城支部 支部長 大六一志 先生の講義資料から抜粋

## <センター的機能による園・学校訪問から>

○保育園等のケース会議で使用した発達検査

- ・遠城寺式・乳幼児分析的発達検査表
  - ・大館市で作成した発達の系統表
- などを利用し、園児の実態を把握します。
- 2月3月は、まとめの時期です。気になる子どもたちが、この1年でどれだけのびたか、チェックし個別の指導計画に反映させてはどうでしょうか。

参考図書：「乳幼児の発達からみる保育“気づき”のポイント44 著横山浩之 診断と治療社」で遠城寺式・乳幼児分析的発達検査表は、子どもの発達を客観的に理解するうえで大変有用なツールとして紹介されています。

インターネットで簡単にダウンロードできますので検索してみてください。

○保育園、小・中学校、高等学校の訪問支援で行うケース検討会のもち方を紹介します。

- ・相談内容に応じて、次の方法でケース検討会を行っています。
- 1 困りごとに応じたケース検討会、先生方の困りごとをQ&A方式で助言しています。
  - 2 ペアレント・トレーニングの「行動を3つに分ける」表を使ってのケース会議
- ・幼児児童生徒の行動を参加者で「好ましい行動、好ましくない行動、許しがたい行動」に分けて、支援方法を検討します。
- 3 応用行動分析によるケース会議
- 幼児児童生徒の問題行動の前に「きっかけ」となった行動、問題行動の後の大人や周囲の人の「対応と結果」を分析し、好ましい行動に改善するための手立てを話し合います。

\*1～3の何れの方法も幼児児童生徒の背景（実態）を把握してから進めます。

### 地域支援担当【問い合わせ先】 何でもお気軽に御相談ください。

比内支援学校 教諭（兼）教育専門監 富山 佳子  
特別支援教育コーディネーター 加藤 弘子

TEL 0186-55-2131 FAX 0186-55-2132

